

気仙沼のコミュニティのために、高校生ができること。

241 班 熊谷みのり 泉祐芽 佐藤琴海 菅原碧 鈴木ゆか

私たちは気仙沼で育ち、地域のコミュニティと密接に関わってきた。しかし、現在、地域住民同士の繋がりが薄れてきてしまっている。そこで高校生である私たちに今何ができるのかを考えることにした。

1 序論

現在の気仙沼市には、コミュニケーションをとる場所が活用されず地域住民同士の繋がりが薄れている、若い人が地元を知らない、自治会などの活動に参加する人がすくなくなっているという課題があると考えた。

これらを改善していくために何ができるのか考えていきたい。

2 本論

私たちは若い人からお年寄りの方までがコミュニケーションをとることができるイベントの企画から運営をすることを考えた。

①アンケート結果

気仙沼に住む方々のコミュニティに対する考えを知るために1年生の保護者 240 人を対象に大きく分けて5つの質問のアンケートを行った。

- 1 現在、自治会の活動に参加していますか。
- 2 現在、若い人からお年寄りの方まで自治会の活動に参加できていると思いますか。
- 3 自治会の運営等でなにか困っていることはありますか。
- 4 地域の子どもとかかわる機会がありますか。
- 5 理想の地域のあり方はどのようなものですか。

以上の質問に30代8人、40代54人、50代22人、60代1人、80代1人、計86の方々に答えて頂いた。

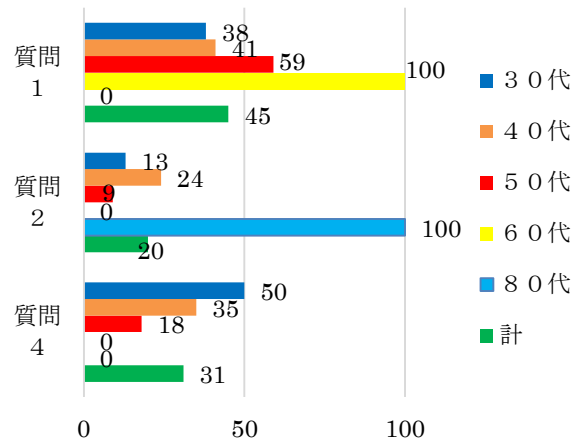


図1 はいと答えた人の割合

質問1、2の結果から全体の半分以下の方しか自治会の活動に参加していないことが分かった。お年寄りの方は自治会に参加しているが、若い人の参加が少ない。その理由として

- ・年配の方で成り立っているため参加しづらい (30代)
 - ・参加したいと思える行事がない (40代)
 - ・子どもの行事や仕事で忙しい (50代)
- などの意見が挙げられた。

質問4の結果から地域の大人と子どもがかかわる機会が部活動などの学校行事や子ども会等のため、子どもとかかわる機会がほとんどない方も多い。グラフから年代が上がるにつれて子どもとかかわる機会が少なくなっていることがわかる。

質問3の回答で多く挙げられた意見は

- ・若い人が役職に就くことを嫌がる (40代)
 - ・活動に消極的 (40代)
- などだった。

質問5では

- ・年配の方から若い人、子どもたちまで楽しめて交流できるイベントをつくり、地域の方々が子どもたちとふれあえる場を設ける（30代）
- ・若者が定住できる職業があること（80代）
- ・災害時に助け合える（40代）

などの意見が挙げられた。「災害時に助け合える」という意見は、顔見知りだからこそ可能になる救助活動のために普段から近所の方々とかかわりを持ちたいという意見だ。このように地域住民間のかかわりを持つことは、地域全体の防災にも役立つ。

②地域の課題

アンケートの結果から、子ども会の活動も少子化により萎縮しつつある中で、地域の中の多世代の交流の減少が深刻化していることが分かった。地域の方々は、地域の未来や発展、存続のため地域住民間での交流をしたいと思っている。しかし、自治会の活動の減少などを理由に交流の機会がなく、近所の人とも疎遠になってしまっているのが現実である。

現在気仙沼にコミュニティは多数存在しているが、参加のきっかけがなく多くの人が参加できずにいる。その結果、若い人がいろいろな活動に参加できず、地元のことをよく知らないという課題も生まれている。アンケートに若い世代が地域に興味を持っていないという意見があったが、実際は、若い世代は地域とかかわりを持ちたくないと思っ

ているわけではなく、関心を持っていながらも参加できずにいることが多い。

③解決方法

私たちは、人交密度（人と関わる密度を表す言葉）を上げるということを目標とした。そのために、私たちの手で地域の方々が交流できるイベントをつくることを考えた。地域

の若い人からお年寄りまでさまざまな世代の方々が参加でき、お互いを知るきっかけになり、自分たちの住む地域を知ることができるイベントは何かと話し合った結果、まちあるきが適していると考えた。

そこで、地域と密接にかかわりながら活動し、実際にまちあるきイベントも行っているNPO法人浜わらす様を訪問し、お話をうかがってきた。イベントを行うにあたってのアドバイスをいただいた。また、実際にイベントを行う際に協力していただけることになった。

「歩いて知ろう！気仙沼！」と題し、春休み中の実行を目標として、現在計画を進めている。

3 結論

私たち高校生が気仙沼のコミュニティのためにできること、それは、高校生という若い世代である私たちが地域に関心を持ち関わり続けていくことだと考えた。一人一人の力は微力だが、これからも気仙沼に住む高校生として、地域に関わり続けていきたい。

4 課題

実際にまちあるきイベントを実行するにあたっての協力者を募らなくてはならない。

5 参考文献

- ・気仙沼市HP
- ・『地元学をはじめよう』吉本哲郎 著 岩波書店

6 協力いただいた方々

- ・気仙沼市役所まちづくり推進課 神谷淳様
- ・NPO法人 浜わらす様
- ・宮城大学 佐々木秀之教授